

大石智著

認知症のある人と向き合う—診察室の対話から思いを引き出すヒント

内田直樹

2015年に旧オレンジプランから新オレンジプランにあらためられ、認知症医療介護における精神科医療の重要性が決定的となり、精神科医は認知症を専門とする診療科の医師として期待されている。しかし、精神科医の教育課程において認知症について学ぶ機会はあまり多くなかったこともあり、実は認知症診療に自信がないという精神科医も少なくないのではないかと考える。本書は、そういった医師向けに最適な一冊となっている。

著者は認知症疾患医療センター長であり、認知症を専門とする医師として市民や医療介護職向けにさまざまな研修会を日々行っている。しかし、工夫をこらして研修会を開催しても、認知症のこと、認知症のある人の心が理解されていない現状があり、研修という方法の限界を感じていたという。そういった中、認知症を専門としない医師から「抗認知症薬は限界があるというけれど、薬を処方しないで医師は何をしたらいいでしょうか」と質問を受けた。具体的な診療方法を伝える必要があると感じ「認知症の診断とともに伝えたい言葉」をテーマに毎月の連載を開始し、この連載をまとめたのが本書であると書籍の中で語られている。

内容はきわめて実践的で、はじめての来院時、スクリーニング検査を行う際、検査結果を説明する際、治療についての対話、抗認知症薬につ

いての説明、いわゆるBPSDについて相談された際や、よくある物盗られ妄想や嫉妬妄想、徘徊について対応する際の対話など、それぞれの場面において相手の心情に配慮してどう言葉を選び、どういった態度で接しているかが示されている。副題でもある「診察室の対話から思いを引き出すヒント」にあふれた内容で明日からの診療に活かせるものとなっているが、エビデンスも重視されており画像検査の必要性や抗認知症薬の効果について最新の研究や臨床試験の結果も示して論じている。

内容はまさに認知症の精神療法について書かれているものの、本書は精神療法をうたっていない。これは、認知症診療に関する知識は精神科医以外の診療科の医師たちにも必要なものとなっているため、他科の先生も読みやすいように極力専門的な表現を避けて書かれていると想像する。精神科に限らない多くの医師が認知症診療についての知識を求めており、私は本書が認知症診療の教科書として必携の一冊になると確信している。認知症を専門とする科の医師として、すべての精神科医が本書の内容に精通している必要があるだろう。

(たろうクリニック)

●B6 変型判 224頁 2020年 定価：2,200円
+税 新興医学出版社刊